

源氏物語

夕霧一

紫式部

青空文庫

つま戸より清き男の出づるころ後夜の

律師のまう上るころ
(晶子)

一人の夫人の忠実な良人りようじんという評判があつて、品行方正を
 標榜ひょうぼうしていた源左大将であつたが、今は女二にょにの宮みやに心を惹ひか
 れる人になつて、世間体は故人への友情を忘れないふうに作りな
 がら、引き続いて一条第ていをお訪ねたずすることをしていた。しかもこ
 の状態から一步を進めないではおかない覚悟が月日とともに堅く
 なつていった。一条の御息所みやすどころも珍しい至誠の人であると、近ご
 ろになつてますます来訪者が少なく、寂さびれてゆく邸やしきへしばしば足

を運ぶ大将によつて慰められていることが多いのであつた。初めから求婚者として現われなかつた自分が、急に変わった態度になるのはきまりが悪い、ただ真心で尽くしているところをお認めになつたなら、自然に宮のお心は自分へ向いてくるに違いないから時を待とうと、こう大将は思つて一日も早く宮と御接近する機会を得たいとうかがい歩いているのである。宮が御自身でお話をあそばすようなことはまだ絶対がない。いつか好機会をとらえて自分の持つ熱情を直接にお告げすることもし、御様子もよく見たいと大将は心に願つていた。

御息所は物怪もののけで重く煩わずらつて小野という叡山えいざんの麓ふもとへ近い村にある別荘へ病床を移すようになった。以前から祈祷きとうを頼みつけて

いて、物怪を追い払うのに得意な律師が叡山の寺にこもっていて、京へは当分出ない誓いを御みほとけ仏にしたというのを招くのに都合がよかつたからである。その日の幾つかの車とか前駆の人たちとかは皆大将からよこされた。かえつて柏かしわぎ木の弟たちなどは自身のせわしさに紛れてか、そうした気はつかないふうであつた。左大将は兄の未亡人の宮を得たい心でそれとなく申し込んだ時に、もつてのほかであるというような強い拒絶的な態度をとられて以来、羞しゆううち恥心から出入りもしなくなつていたのである。それに比べて大将は非常に上じようず手な方法をとつたものといわねばならない。

修法をさせていると聞いて大将は僧たちへ出す布施や浄衣の類までも細かに気をつけて山荘へ贈つたのであつた。その際病人の

御息所は返事を書くべくもない容体であつたし、女房から挨拶あいさつ書きなどを出しておいては、先方の好意が徹底しなかつたもののようにお思ひになるであろうし、宮様がお高ぶりになりすぎるようにもお思われになるであろうからと女房らがお願ひしたために、宮が引き受けて礼状をお書きになつた。美しい字のおおような短いお手紙ではあるが、なつかしい味のあるものであつたから、いよいよ大将の心は傾いて、それ以後たびたびお手紙を差し上げるようになった。結局自分の疑いは疑いでなくなつてゆきそうであると、雲井くもいの雁夫人かりが早くも観察していることにはばかられて、大将は小野の山荘を訪ねたく思ひながらも実行をしかねていた。

八月の二十日ごろで、野のながめも面白いころなのであるから、

山莊住まいをしておいでになる恋人を大將はお訪ねしたい心がしきりに動いて、

「珍しく山から下つていられる某律師にぜひ逢つて相談をしなければならぬことがあつたし、御病氣の御息所の別莊へお見舞いもしがてらに小野へ行こうと思う」

と何げなく言つて大將は邸やしきを出た。前駆もたいそうにはせず親しい者五、六人を狩かりぎぬ衣姿にさせて大將は伴つたのである。たいして山深くはいる所ではないが、松が崎さきの峰の色なども奥山ではないが、紅葉もみじをしていて、技巧を尽くした都の貴族の庭園などよりも美しい秋を見せていた。そこは簡単な小柴垣こしばがきなども雅致のあるふうにめぐらせて、仮居ではあるが品よく住みなされた山莊

であつた。寢殿ともいふべき中央の建物の東の座敷のほうに祈祷の壇はできていて、北側の座敷が御息所の病室となつているために、西向きの座敷に宮はおいでになつた。物怪を恐れて御息所は宮を京の邸へおとどめしておこうとしたのであるが、どうしてもいっしょにいたいとついでにおいでになつた宮を、物怪のほかへ散るのを恐れて少しの隔てではあるが病室へはお近づけ申し上げないのである。客を通す座敷がないために、宮のおいでになる室とは御簾みすで隔てになつた西の縁側についた座敷へ大将を入れて、上級の女房らしい人たちが御息所との話の取り次ぎに出て来た。

「まことにもつたいなく存じます。御親切にたびたびお尋ねくださいました上に、御自身でまたお見舞いくださいますあなた様に

対して、もう亡なくなつてしまひますれば自分でお礼を申し上げることができないと考えますことで、もう少し生きようといたします努力をしますことになりました」

これが御息所からの挨拶あいさつである。

「こちらへお移りになります日に、私もお送りをさせていただきたかつたのですが、あやにく六条院の御用の残つたものがありましたものですから失礼をいたしました。その以後も何かと忙しいことがあつたものですから、お案じいたしております心だけのことができておらないのを、不本意に心苦しく存じております」

などと大将は取り次がせている。奥のほうに静かにして宮はおいでになるのであるが、簡単な山荘のことであるから、奥といつ

ても深いことはないのであつて、若い内親王様がそこにおいでになる気配けはいはよく大将にわかるのである。柔らかに身じろぎなどをあそばす衣擦きぬすれの音によつて、宮のおすわりになつたあたりが想像された。魂はそこへ行つてしまつたようなうつろな氣になりながら、御息所の病室とここを通う取り次ぎの女房の往復の暇どる間を、これまでから話し相手にする少将とかそのほかの宮の女房とかを相手にして大将は語つていたのであつた。

「宮様のほうへ何うようになりましてから、もう何年と年で数えなければならぬほどになります、まだきわめてよそよそしいお取り扱みすいを受けておりますこと、恨めしい氣がしますよ。こゝうした御簾みすの前で、人づてのお言葉をほのかに承りうるだけでは

ありませんか。私はまだこんな冷たい御待遇というものを知りませんよ。どんなに古風な気のきかない男に皆さんは私を思っておられるだろうと恥ずかしく思います。青年で気楽な位置におりましたところから、続いて恋愛を生活の一部にして来ていますれば、こんな不器用な恋の悩みをしないで済んだらうと思います。私のように長く心の病気をかさえている人はないでしょう」

大将はこの言葉のとおりにもう軽々しい多情多感な青年ではない重々しい風采ふうさいを備えているのであるから、その人の切り出して言ったことがこれであるのを、女房たちはこんなことになるかともかねてあやぶんでいたと、途方に暮れた気がするのであった。「私が拙ますい御挨拶あいさつなどをしてはかえっていけませんから、あな

たが」

こんなことを皆ひそかに言い合っていて、

「あんなにもお言いになります方に、あまり無関心らしくあそばさないほうがよろしゅうございましょう。何とかおつしやつてくださいませ」

と宮へ申し上げると、

「病人が自身でお話を申し上げることできませんような失礼な際に、私でも代わりをいたしましてお逢い申し上げたいのでございますが、病人が一時非常に悪うございましたために、私までも健康を害しまして、それでよんどころなく」

こうお取り次がせになった。

「それは宮様のお言葉ですか」

と大将は居ずまいを正した。

「御息所の御容体を、私自身の病などと比較にもなりませんほどお案じいたしておりますのも何の理由からでございましょう。もつたいない話ではございますが、御憂鬱ゆううつな御気分が朗らかなにられますまで、あの方様が御健康でおいでくださいますことは願わしいことだと存じ上げるからでございます。あの方様へお尽くしいただけのものとして、私のあなた様へ持ちます真心をお認めくださいませんことはお恨めしいことでございます」

と大将は言う。

「ごもつともでございませす」

と女房らが言う。

日は落ちて行く刻で、空も身にしむ色に霧が包んでいて、山の蔭かげはもう小暗おくらい気のする庭にはしきりにひぐらし蝸が鳴き、垣根かきねの撫子なでしこが風に動く色も趣多く見えた。植え込みの灌木かんぼくや草の花が乱れほうだいになった中を行く水の音がかすかに涼しい。一方では凄すごいほどに山おろしが松こすえの梢を鳴らしていたりなどして、不断経の僧の交替の時間が来て鐘を打つと、終わって立つ僧の唱える声と、新しい手代わりの僧の声とがいつしよになって、一時に高く経声の起こるのも尊い感じのすることであった。所が所だけにすべてのことが人に心細さを思わせるのであったから、恋する大将の物思わしきはつるばかりであった。帰る気などには少しもなれな

い。律師が加持をする音がして、陀羅尼經だらにを鏗さびた声で読み出した。御息所の病苦が加わったふうであると言つて、女房たちはおかたそのほうへ行つていて、もとから療養の場所で全部をつれて来ておいでになるのでない女房が、宮のおそばに侍しているのは少なく、宮は寂しく物思いをあそばされるふうであつた。非常に静かなこんな時に自分の心もお告げすべきであると大将が思つてみると、外では霧が軒にまで迫つてきた。

「私の帰る道も見えなくなつてゆきますようなこんな時に、どうすればいいのでしょうか」

と大将は言つて、

山里の哀れを添ふる夕霧に立ち出でんいそらもなきこちして

と申し上げると、

山がつの籬まがきをこめて立つ霧も心空なる人はとどめず

こうほのかにお答えになる優美な宮の御様子がうれしく思われ
て、大將はいよいよ帰ることを忘れてしまった。

「どうすることもできません。道はわからなくなってしまうし
たし、こちらはお追ひ立てになる。だれも経験することを少しも
経験せずに始めようとする者は、すぐこうした目にあいます」

などと言って、もうここに落ち着くふうを見せ、忍び余る心もほのめかしてお話しする大将を、宮は今までからもその気持ちを一全然お知りにならないのでもなかったが、気づかぬふうをしておいでになったのを、あらわに言葉にして言うのをお聞きになっては、ただ困ったこととお思われになって、いつそうものを多くお言いにならぬことになったのを、大将は歎息たんそくしていて、心の中ではこんな機会はまたとあるわけもない、思い切ったことは今でなければ実行が不可能になろうとみずからを励ましていた。同情のない軽率な人間であるとお思われしてもしかたがない、せめて長く秘めてきた苦しい思いだけでもおささやきしたいと思つた大将は、従者を呼ぶと、もとは右近衛府うこんえふの将監しょうげんであつて、五位

になつた男が出て来た。大将は近く招いて、

「こちらへ来ておられる律師にぜひ逢つて話すことがあるのだが、御病人の護身の法などをしておられて疲れておられる律師は休息もしなければならぬことと思うから、私はこちらで泊まつて、初夜のお勤めを終わられたところに律師のいるほうへ行こうと思う。二、三人だけはこの山莊くろすののほうへ人を残しておいて、そのほか隨身くるすのなどの者は栗栖野しやうの莊が近いはずだから、そのほうへ皆やつて、馬まぐさに糧秣まぐさをやつたりさせることにして、ここで騒さわがしく人声などは立てさせぬようにしてくれ。こんな外泊は人の中傷の種になるのだから気をつけてくれるように」

と命じた。訳のあることに相違ないと思つてその男は去つた。

それから大将は女房に、

「道もわからなくなりましたからここでごやつかいになりましよう、かありませんならこの御簾みすの前を拝借させてください。阿闍梨あじやりの御用が済むまでです」

と落ち着いたふうで言うのであった。これまではこんな長居をしたこともなく、浮薄な言葉も出した人ではなかったのに、困ったことであると宮はお思いになったが、わざとがましく隣室へ行ってしまうことも体裁のよいものでないような気があそばされるので、ただ音をたてぬようにしてそのままおいでになると、思ったことを吐露し始めた大将は、お心の動くまでというように、いろいろと言葉を尽くすのであったが、宮へお取り次ぎにいざり

入る人の後ろからそつと御簾をくぐつて来た。夕霧が盛んに家の中へ流れ込むところで、座敷の中が暗くなっているのである。その女房は驚いて後ろを見返つたが、宮は恐ろしくおなりになつて、北側の襖からかみ子の外へいぎつて出ようとあそばされたのを、大将は巧みに追いついて手でお引きとめした。もうお身体からだは隣の間へはいつていたのであるが、お召し物の裾すそがまだこちらに引かれていたのである。襖子は隣の室の外から鍵かぎのかかるようにはなつていないために、それをおしめになつたまままで、水のように宮は慄ふるえておいでになつた。女房たちも呆然ぼうぜんとしていかにすべきであるかを知らない。こちらの室には鍵があつても、この場合をどうすればよいかに皆当惑したのである。無理やりに荒々しく手を

宮のお召し物から引き放させるようなこともできる相手ではなかつた。

「御尊敬申し上げておりますあなた様がこんなことをなさいますとは思ひもよらぬことでございます」

と言つて、泣かんばかりに退去を頼むのであるが、

「これほどの近さでお話を申し上げようとするのを、なぜあなたがたは不思議になさるのでしよう。つまり私ですが、真心をお見せすることになつて長い年月も重なつているはずです」

と女房らに答えてから、大將は優美な落ち着きを失わずに、美しいこの恋を成り立たせなければならぬことを宮へお説きするのであつた。宮は御同意をあそばすべくもない。こんな侮辱までも

忍ばねばならぬかというお気持ちばかりが湧き上がるのであるから何を言うこともおできにならない。

「あまりに少女らしいではありませんか。思い余る心から、しいてここまで参ってしまったことは失礼に違いございませんが、これ以上のことをお許しがなくてしようとは存じておりません。この恋に私はどれだけ煩悶はんもんに煩悶を重ねてきたでしょう。私が隠しておりしても自然お目にとまっていますはずなのですが、しいて冷たくお扱いになるものですから、私としてはこのほかにいたしようがないではございませんか。思いやりのない行動として御反感をお招きしても、片思いの苦しきだけは聞いていただきたいと思います。それだけです。御冷淡な御様子はお恨めしく思いま

すが、もつたいないあなた様なのですから、決して、決して」

と言つて、大将はしいて同情深いふうを見せていた。あるところまでよりしまらぬ襖からかみ子こを宮がおさえておいでになるのは、これほど薄弱な防禦ぼうぎよもないわけなのであるが、それをしいてあげようとも大将はしないのである。

「これだけで私の熱情が拒めると思おぼしめ召すのが気の毒ですよ」

と笑つていたが、やがておそばへ近づいた。しかも御意志を尊重して無理はあえてできない大将であつた。宮はなつかしい、柔らかみのある、貴女きじよらしい艶えんなところを十分に備えておいでになった。続いてあそばされたお物思いのせいakahつそりと瘦やせておいでになるのが、お召し物越しに接触している大将によく感ぜら

れるのである。しめやかな薰くんこう香の匂においに深く包まれておいでになることも、柔らかに大将の官能を刺激しげきする、きわめて上品な可憐れんさのある方であつた。

吹く風が人を心細くさせる山の夜ふけになり、虫の声も鹿しかの啼なくのも滝の音も入り混じつて艶えんな気分をつくるのであるから、ただあさはかな人間でも秋の哀れ、山の哀れに目をさまして身にしむ思いを知るのであらうと思われる山荘に、格子もおろさぬままで落ち方になつた月のさし入る光も大将の心に悲しみを覚えさせた。「まだ私の心持ちを御理解くださらないのを拝見しますと、私はかえつてあなた様に失望いたしますよ。こんなに愚かしいまでに自己を抑制することのできる男はほかにないだらうと思うのです

が、御信用くださらないのですか。何をいたしても責任感を持たぬ種類の男には、私のようなのをばかな態度だとして、直ちに同情もなく力で解決をはかってしまうのです。あまりに私の恋の価値を軽く御覧になりますから、知らず知らず私も危険性がはぐくまれてゆく気がいたします。男性とはどんなものかを過去にまだご存じでなかったあなた様でもないでしょう」

こう責められておいでになる宮は、どう返辞をしてよいかと苦しく思っておいでになる。もう処女でないからということ言葉をにほのめかされるのを残念に宮はお思いになった。薄命とは自分のような女性をいうのであろうともお悲しまれになって、大将のいどんで来るのを死ぬほど苦しく思召された。

「私のこれまでの運命はどんなにまずいものでございまして、それだからといって、これを肯定しなければならぬとは思われない」

と、ほのかに可憐な泣き声をお立てになつて、

われのみや浮き世を知れるためしにて濡れぬ添そふ袖での名を朽くすべき

ほかへお言いになるともなくお言いになつたのを、大将がさらに自身の口にのせて歌うのさえ宮は苦痛にお思ひになつた。

「誤解をお受けしやすいようなことを私が申したものですから」

などと言つて、微笑するふうで、

「おほかたはわが濡れ衣をきせずとも朽ちにし袖の名やは隠る

もうしかたがないと思召してくださいたらどうですか」

こう言つて、月の光のあるほうへいっしょに出ようと大将は勧めするのであるが、宮はじつと冷淡にしておいでになるのを、大将はぞうさなくお引き寄せして、

「安価な恋愛でなく、最も高い清い恋をする私であることをお認めになつて、御安心なすってください。お許しなしに決して、無

謀なことはいたしません」

こうきつぱりとしたことを大将が言っているうちに明け方に近くもなった。澄み切った月の、霧にも紛れぬ光がさし込んできた。短い^{ひさし}庇の山荘の軒は空をたくさんに座敷へ入れて、月の顔と向かい合っているようなのが恥ずかしくて、その光から隠れるように紛らしておいになる宮の御様子が非常に^{えん}艶であつた。故人の話も少ししだして、閑雅な態度で大将は語っているのであつた。しかもその中で故人に対してよりも劣つたお取り扱いを恨めしがつた。宮のお心の中でも、故人はこの人に比べて低い地位にいた人であるが、院も^{みやすどころ}御息所も御同意のもとでお嫁^{とつ}がせになつて自分はその人の妻になつたのである、その良人^{おつと}すら自分に対してい

いていた愛はいささかなものであった、ましてこうしてあるまじい恋に墮おちては、しかも知らぬ中でなく、故人の妹を妻に持つこの人との名が立つては、太政大臣家ではどう自分を不快に思うことであろう、世間で譏そしられることも想像されるが、それよりも院がお聞きになってどう思召すであろう、必ずお悲しみあそばすであらうなどと、切り離すことのできぬ関係の所々のことをお考えになると、このことが非常に情けなくお思われになって、自分はやましいところもなく、大将の情人では断じてなくとも噂うわさはどんなふう^に立てられることか、御息所が少しも関与しておいでにならぬことが子として罪であるように思召され、こんなことをあとでお聞きになり、幼稚な心からときがたい誤解の原因を作ったと

お言いになろうこともわびしく御想像あそばされる宮は、

「せめて朝までおいでにならずにお帰りなさい」

と大将をお促しになるよりほかのことはおできにならないのである。

「悲しいことですね。恋の成り立った人のように分けて出なければならぬ草葉の露に対してすら私は恥ずかしいではありませんか。ではお言葉どおりにいたしますから、私の誠意だけはおくみとりください。馬鹿正直に仰せどおりにして帰ります私に、若し、じょうず上手に追いやってしまったのだというふうを今後お見せになることがありましたなら、その時にはもう自製の力をなくして情熱のなすがままに自分をまかせなければならぬことと思いま

すよ」

大将は心残りを多く覚えるのであるが、放縦な男のような行為は、言っているごとく過去にも経験したことがなく、またできない人であつて、恋人の宮のためにもおかわいそうなことであり、自分自身の思い出にも不快さの残ることであらうなどと思つて、自他のために人目を避ける必要を感じ、深い霧に隠れて去つて行こうとしたが、魂がもはや空虚うつろになつたような気持ちであつた。

「萩原はぎはらや軒端のきぎばの露にそぼちつつ八重立つ霧を分けぞ行くべき

あなたも濡衣ぬれぎぬをお乾ほしになれないでしょう。それも無情に私

をお追いになった報いとお思いになるほかはないでしょう」

と大將が言った。そのとおりである。名はどうしても立つであろうが、自分自身をせめてやましくないものにしておきたいと思召す心から、宮は冷ややかな態度をお示しになって、

「わけ行かん草葉の露をかごとにてなほ濡衣をかけんとや思ふ

ひどい目に私をおあわせになるのですね」

と批難をあそばすのが、非常に美しいことにも、貴女らしいふうにもお見えになった。今まで古い情誼じょうぎを忘れない親切な男になりすまして、好意を見せ続けて来た態度を一変して好色漢にな

つてしまふことが宮にお気の毒でもあり、自身にも恥ずかしいと、大将は心に燃え上がるものをおさえていたが、またあまり過ぎた謙抑けんよくは取り返しのつかぬ後悔を招くことではないかともいろいろに煩悶はんもんをしながら帰って行くのであつた。深い山里の朝露は冷たかつた。夫人がこの濡れ姿を見とがめることを恐れて大将は家へは帰らずに六条院の東の花散里はなちるさと夫人の住居すまいへ行つた。まだ朝霧は晴れなかつた。町でもこんなのであるから、小野の山荘の人はどんなに寂しい霧を眺めておいでになるであらうと大将は思ひやつた。

「珍しくお忍び歩きをなさいましたのですよ」

と女房たちはささやいていた。

夕霧の大将はしばらく休息をしてから衣服を脱ぎかえた。平生からこの人の夏物、冬物を幾襲かさねとなく作つて用意してある養母であつたから、香の唐櫃からびつからすぐに品々が選り出されたのである。朝の粥かゆを食べたりしたあとで夫人の居間へ夕霧ははいつて行つた。夕霧はそこから小野へ手紙をお送りした。

山莊の宮は予想もあそばさなかつた、にわかな変わった態度を男のとり出した昨夜ゆうべのことで、無礼なども、恥を見せたともお思ひになることで夕霧への御反感が強かつた。御息所の耳へはいることがあつたならと羞恥しゆうちをお覚えになるのであるが、またそんなことがあつたとは少しも御息所が知らずにいて、不意に何かのことから氣のついた時に、隔て心があるように思われるのも苦し

い、女房が有りのままを話すことによつて母を悲しませることがあつてもやむをえないと宮はおあきらめになるよりほかはなかつた。親子と申してもこれほど親しみ合う仲は少ない母と御子なのである。世間に噂の立つていることも親にはなお秘密にしておくことがよく昔の小説などにはあるが、宮にそれはおできになれないことであつた。女房たちは昨夜の^{ゆうべ}ことを御息所が片端だけ聞いてもほんとうにあやまちが起こつたことのように歎かれるのであろうから、今はまだそうした思いをさせる必要はないと相談をしていながらも、まだどの程度の関係にまで進んだのか進まなかつたのかに疑問を持つていて、今来た大将の手紙が真相を説明してくれるであらうと思う好奇心から、宮がお読みになる時に盗み見

をしたいと願っているのであるが、宮はお開きになろうともあそばされないのでに気を揉もんで、

「全然御返事をあそばさないことも、たよらない御性質のよう
想像をなさることもございましょうし、お若々し過ぎることで
もございます」

などと言つて、大将の手紙を拈ひろげると、

「思いがけないことで、たとえあれだけのことにせよ男の人を
接近させたことは、皆私自身の軽率から起こした過失だとは思
うがね、思いやりのないことをした人を、私の憎む心がまだ直ら
ないのだから、読まなかつたと言つてやるがいい」

と不機嫌ふきげんに仰せられて宮は横になつておしまいになつた。夕霧

の手紙は宮の御迷惑になるようなことを避けて書かれたものであつた。

たましひをつれなき袖にとどめおきてわが心から惑はるるかな

「ほかなるものは」(身を捨てていにやしにけん思ふよりほかなるものは心なりけり)と歌われておりますから、昔もすでに私ほど苦しんだ人があつたと思ひまして、みずからを慰めようとはいたすにもかかわらずなお魂は身に添いません。

こんなことが長く書かれてあるようであつたが、女房も細かに

読むことは遠慮されてできないのである。事の成り立つたのちに書かれた文ふみではないようであるとは見ながらも、なお疑いを消してはいなかった。女房たちは宮の御気分のすぐれぬことをなげ歎きな
がら、

「昨晚のことがまだ不可解なことに思われます。非常に御親切だ
ということとは長い間に私どももお認めしている方ですけれど、良お
人つとという御関係におなりになった時と、熱のある友情期間とが同
じでありうるでしょうかどうか心配ですよ」

などと言い、親しく宮にお仕えしている女房たちもこのことに
重い関心をもって宮のためにお案じ申し上げているのであった。
御息所はまだこのことを少しも知らずにいた。

物怪に煩っている病人は重態に見えるかと思うと、またたちまちに軽快らしくなることもあつて、平常に近い気分になつていたこの日の昼ごろに、日中の加持が終わり、律師一人だけが病床に近くいて陀羅尼經だらにを讀んでいた。病人の苦痛のやや去つたことを律師は喜んで、祈りの終わりに、

「大日如来が嘘うそを仰せられたのでなければ、私が熱誠をこめて行なう修法に効果の見えぬわけはありません。悪霊は執拗しつようであつても、それは業ごうにまとわれたつまらぬ亡者もうじゃではありませんか」と太い枯れ声で言つていた。俗離れのした強い性格の律師で、突然、

「あ、左大将はいつごろから宮様の所へ通つて来ておいでになり

ますか」

と問うた。

「そんなことはありません、亡なくなられた大納言の親友でしたから、あの方が遺言して宮様のことも頼んでお置きになったものですから、その約束をお守りになって、それ以来親切によく訪たずねて来てくださることが、もう何年も続いています。そんなお交つきあ際の仲なのですが、この遠い所まで私の病気を見舞いに来てくださいましたそうですから、恐縮して私は聞いておりましたよ」

みやすどころ
御息所の答えはこうであつた。

「とんでもない。私に隠しだてをなさる必要はない。今朝後夜けさごやの勤めにこちらへ参つた時に、あちらの西の妻戸からりっぱな若い

方が出ておいでになったのを、霧が深くて私にはよく顔が見えませんでした。弟^{でし}どもは左大將が帰って行かれるのじや、昨夜^{うべ}も車をお返しになってお泊まりになったのを見たとき口々に言っておりました。そうだろうと私もうなずかれました。よい匂い^{にお}にする方じやからな。しかしこの御関係は結構なことじやありませんなあ。あちらがりっぱな方であることに異議はないが、しかしどうも賛成ができません。子供でいられたころからあの方の御祈^{きとう}は御祖母の宮様から私が命ぜられていたものじやから、今も何かといつては私に頼まれるのですがな、そのことはよくありません。奥さんの勢力が強くてしかたがない。盛んな一族が背景になっていますからな。お子さんはもう七、八人もできているでしょう。

こちらの宮様がそれにお勝ちになることはできないでしょうな。

また一方から言えば女という罪障の深いものに生まれて、救いのない長夜の闇やみに迷うのもこうした関係から生じる煩悩ぼんのうが原因になり、恐ろしい報いを受けることになりますからな、長い絆きずなが付きまとわることですからな、絶対によろしくないことじゃ」

律師は頭を振り立てながら、興奮して乱暴なことも言うのである。

「私には腑ふに落ちないことですよ。そんな様子などは少しもお見せにならなかつた方ですもの、昨日は私があまり苦しんでいたものですから、しばらく休息をしてからまた話そうとお言いになつて、あちらにいらつしやると女房たちは言っていました、そん

なふうで夜明けまでおいでになったのでしよう。至極まじめな堅い方をそんなふうに言う人があるのはよくありません」

と御息所はなお不審をいだくふうを僧に見せながらも、心うちではそんなことがあったのかもしれない、宮を恋しくお思いうる様子はおりおり見えたが、りっぱな人格のある人は人の批難の種になるようなことは避けて、まじめな友情だけを見せていたために、危険はないものとして自分は油断をしていたが、おそばに人も少ないのを見てお居間へはいるようなこともしたのではないかと思われもした。律師が立つて行ったあとで、小少将こしょうを呼んで、こうこうしたことを聞いたとまず御息所は言った。

「ほんとうのことはどれほどのことだったのかね。なぜ私にくわ

しく報告してくれなかつたの。人の言うようなことは決してあるまいとは思つていても私の心は不安でならない」

聞く御息所に気の毒な思いをしながらも、小少将は昨日のことを初めからくわしく話した。今朝の手紙の内容、宮がその時にお洩らしもになつた言葉なども言つて、

「ながくおさえ続けておいでになりました心を、お知らせなさろうというだけのことだつたかと存じます。宮様への敬意をお失いになるようなことはございませんで、御迷惑とお考えになつて朝まではおいでになられませんか早く出てお行きになりましたのを、ほかの人はどんなふうに申し上げたのでしよう」

と、律師とは知らずに、ほかに密告した女房があつたのだと小

少将は思つて言った。御息所は何も言わずに、残念そうな表情をしていたが涙がほろほろとこぼれ出した。見ていて小少将は気の毒で、なぜありのままのことを言ったのだろう、病気の上に御息所は煩悶はんもんをして、どんなに堪えがたいことであろうと悔いた。

「襖からかみ子はしめたままでございました」

などと、今になつて、少しでもよいように取りなそうと努めるのであつたが、そんなことはどうでも、なぜそんなに近くへ男の寄つて来るようなことを宮がおさせになつたかと思うと悲しい。やましいところはおありにならなくても、さつき聞いたようなことを言つて騒いでいる律師の弟子たちは、宮様のためにこれは不利であると思つて隠すようなことをするはずもない、どう人に言

いわけをすればいいことかわからない、絶対にないことと打ち消すことはしなければなるまい、何にしても心の幼稚な女房ばかりがお付きしていても思う心を御息所は口へ出しては言えなかつた。病気が重い上に大きい衝動を受けたのであつたからこの人はいたましいほどにも苦しんだ。神聖な方としてお守り立もてしていきたかつた宮様も、世間の女並みに浮き名を立てられておしまひになることがもつてのほかには思われてならなかつた。

「今日のような私の気分の少しよい間に、宮様がこちらへおいでくださるように申し上げなさい。あちらへ伺うはずだけれど動けそうではないのだからね。ずいぶんながくお目にかからない気がする」

御息所は目に涙を浮かべてこう言っているのであった。

小少将は宮のお居間へ帰って、御息所の最後の言葉だけをお伝えした。宮は母君の所へ行こうとあそばされて、額髪の涙でかたまつたのをお直しになり、お召し物の綻ほころんでいた単衣ひとえをお着かえになつても、お気が進まないでじつとすわつておいでになるのであつた。この女房たちもどう自分を見ているのであろう、御息所も今は何もお知りにならないで、あとで少しでも昨夜のことをお聞きになることがあつたなら、素知らぬ顔をしていたと今日の自分が思われることであろうとお考えになると、非常に恥ずかしくおなりになり、宮はまた横になつておしまいになつて、

「私はどうも気分がよくない。このまま病氣になつて死んでしま

うのはいいことだけれどね、脚あしからのぼせ上がって来たようだから」

とお言いになり、宮は脚をお揉もませになった。あまり物思いをあそぼすためにおのぼせになったのである。

「御息所に昨晚のことをほのめかしてお話しした人があったのでございますよ。ほんとうのことが聞きたいとお言いになるものでございますから、正直にお話しいたしましたが、お襖からかみ子のことだけは少し誇張をいたしましたして、しまいまで皆はあいたのでないように申し上げておきましたから、もしくわしいお話を聞こうとなさいましたら、私と同じようにおっしゃってくださいませ」

こう小少将が言った。御息所が悲しんでいることは申さない。

宮はそれでお呼びになったのであると、いつそう侘しい気におなりになり、何も仰せられなかったが、お枕まくらから雫しずくが落ちていた。この問題だけではなく、自分の意志でなくした結婚からこの方、母に物思いばかりをさせる自分であると、宮は子としてののかいのないことを悲しんでおいでになって、あの大將もこのままで心をひるがえすことはせずに、いろいろと自分を苦しめるであろうことが煩わしい、それについて立つ噂うわさもあろうと御煩悶はんもんをあそばした。弁明することのできない弱い女の自分は、無根のことであるに悪名をきせられることになるのであろうと、穢けがれのない自信は持つておいでになるのであるが、皇女に生まれた者があればど異性と近くいて夜の何時間かを過ごしたというようなことはあ

りうることでなく、あつてよいわけのものでもないとお思ひになることで、御自身の運命がお悲しまれになり、ゆううつ憂鬱にされておいでになつたが、夕方にまた、

「ぜひおいでなさいますように」

と、御息所のほうから言つて来たので、間にある座敷倉の戸を、向こうとこちらと両方であけて宮は御息所の東の病室へおいでになつた。

病苦がありながらも御息所はうやうやしく宮をお取り扱ひした。平生の作法どおりに起き上がつてもいた。

「だらしくいたしているのでございますから、お迎えいたしません。ただ二、三日だけお目にかから

なかつたのでございますのを、何年もお逢い^あすることのできなかつたほど寂しく思われますのも味気ないことでございます。親子の縁では未来で必然的にお逢いできますともきまらないのでございますからね。もう一度生まれてまいりましてもだめなのでございますのに、考えますれば瞬間で永遠の別れになりますわれわれがあまりに愛し過ぎて暮らしましたのが、後悔いたされます」

などと、御息所は泣くのであった。宮もいろいろなことがお心にあつてお悲しい時で、何もお言いになることができずに、ただ母君の顔をながめておいでになつた。非常にお内気で思うことはきはきとお告げになることもおできにならずに、恥ずかしいお様子ばかりのお見えになるのがおかわいそうで、御息所は昨日の

ことをお尋ねすることもできない。灯ひを早くつけさせてお夕食な
どもこちらで差し上げさせることに御息所はした。今朝から何も
召し上がらないことを御息所は聞いて、ある物は自身で料理をし
変えさせることを命じまでしてお勧めするのであるが、宮は御箸はし
をお触れになる気にもおなりになれなかつた。ただ母君の容体が
よさそうである点だけで少しの慰めを得ておいでになつた。

夕霧の大将からまた手紙が来た。事情を知らない女房が使いか
ら受け取つて、

「大将さんから少将さんというお手紙がまいりました」

と、この座敷で披露ひろうしたことは、宮のお心をさらに苦しくさせ
たことであつた。少将はすぐにそれを手もとへ取つてしまった。

「どんなお手紙」

と、今までそのことに一言も触れなかった御息所も問うた。反抗的になっていた御息所の心も、何時間かのうちに弱くなり、人知れず大将の今夜の来訪を待っていたのであるから、手紙が来るのは自身で来ぬことであろうと胸が騒いだのである。

「およこしになった手紙のお返事はなさいまし、しかたがございません。一度立てた名を取り消すような評判はだれがしてくれましょう。きれいな御自信はおありになっても、だれがそれを認めてくれましょう。素直にお返事もあそばして、冷淡になさらないほうがよろしゅうございます。わがままな性格だと思われてはなりません」

と宮に申し上げて、御息所みやすどころは手紙を少将から受け取ろうとした。少将は心に当惑をしながらも渡すよりほかはなかつた。

冷ややかなお心を知りましたことによつてかえつておさえがた
いものに私の恋はなつていきそうです。

せくからに浅くぞ見えん山河やまかはの流れての名をつつみはず
ば

まだいろいろに書かれてある手紙であつたが、御息所は終わり
までを読まなかつた。この手紙も宮との関係を明瞭めいりょうに説明し
たものでなくて恋人の冷ややかであつたことにこうして酬むくいると

かしわ

いうように、今夜も来ない大将の態度を御息所は悲しんだ。

木ぎが宮にお持ちする愛情のこまやかでないのを知った時に、御

息所は悲観したものであるが、ただ一人の妻として形式的には鄭ていちよう

重じゆうをきわめたお取り扱いを故人がしたこと、強みのある気

がして慰められはした。それでも心から御息所は宮が御幸福にお
なりになったとは思わなかった。それさえもそうであったのに、

今度のことは何たる悲しいことであろう。太政大臣家での取り沙ざ

汰たは想像するだにいやであると御息所は思うのである。なおどう

大将が言ってくるかと思いたい心から、非常に苦しい身体からだの調子で

あるのを忍んで、目を無理にあけるようにもして書いた力のない、

鳥の足跡のような字で返事をするのであった。

もう私はなおる見込みもなくなりました。宮様はただ今こちらへ見舞いに来ておいでになるのでございまして、お勧めをしてみましたが、めいつたふうになっておいでになりました、お返事もお書けにならないようでございますから、私が見かねまして、

をみなへししを
女郎花 萎るる野辺をいづくとて一夜ばかりの宿を借りけん

こう書きさしただけで紙を巻いて出した。そのまままた病床に横たわった御息所ははなはだしく苦しみだした。物もの怪のけが油断をさせようと一時的に軽快ならしめていたのかと女房たちは騒ぎだ

した。効験のいちじるしい僧が皆呼び集められて、病室は混雑していた。あちらへお帰りになるように女房たちはお勧めするのであるが、宮は御自身をお悲しみになる心から、いつしよに死のうと思召して母君からお離れにならないのであった。

夕霧はこの日の昼ごろから三条の家に行った。今夜また小野の山荘へ行くことは、まだない事実をあることらしく人に思わせるだけ、自分のためにはよい結果をもたらすことでないと行きたい心をしいておさえることに努力していたが、これまで恋しくお思っていたことは物の数でもないほどに昨日からにわかにか百倍した恋に苦しむ大将であった。夫人は山荘の昨日の訪問の様子をほかから聞き出して不快がっていたのであるが、知らぬ顔をして子

供の相手をしながら自身の昼の居間のほうで横になっていた。

八時過ぎに小野の山荘で書いた御息所の返事は大将の所へ持つて来られたのであるが、大病人の書いた鳥の跡は一度見たのではわかりにくい。夕霧が灯ひを近くへ持つて来させてさらに丁寧にもうとしている時に、あちらにいたのであるが夫人はそれを見て、そつと寄つて来て後ろから奪つてしまった。夕霧はあきれ、

「どうするのですか。けしからんじやありませんか。六条の東のお母様のお手紙ですよ。今朝から風邪かぜでお悪かつたから、院の御殿へ伺つたままでこちらへ歸つて来て、もう一度お訪ねたずすることをしなかつたのがお気の毒だつたから、御様子を聞く手紙を持た

せてやったのじやありませんか。御覧なさい、恋の手紙というよ
うな書き方ですか、これは。はしたない下品なことをするじやあ
りませんか。年月に添って私を侮あなどることがひどくなるのは困った
ものだ。女房たちがどう思うかを少しも考慮に入れないのですね」
と言つて歎たんそく息はしたが、惜しそうにしてしいて夫人の手から
取り上げることはしなかつたから、雲井くもいの雁夫人かりもさすがにこの
場で読むこともできずにじつと持つていた。

「年月に添つて侮るなどは、あなた御自身がそうでいらつしや
るから、私のことまでも臆おくそく測そくなさるのよ」

夫人は良人おととがあまりにまじめな顔をしているのに気おくれがし
て、若々しく甘えてみせた。夕霧は笑つて、

「それはどちらのことでもいい。世間のどこにもあることだからね。けれどもこれだけはほかにないことですよ。相当な身分の男がただ一人の妻を愛して、何かに怖おそれている鷹たかのように、じつと一所を見守っているようなのに似た私を、どんなに人が笑っていることだろう。そんな偏屈な男に愛されていることはあなたにとつても名誉じゃありませんよ。おおぜいの妻さいしやう 妾めかけの中ですぐれて愛される人は、見ない人までもが尊敬を寄せるものだし、自分でも始終緊張していることができて、若々しい血はなくならないであろうし、真の生きがいを感じる人が多いだろうと思われる。私のように、昔の何かの小説にある老いぼれの良人のようにあなた一人をただ夢中に愛しているようなことはあなたのために結構

なことではありませんよ。そんなことはあなたが世間からはなやかに見られることでは少しもないからね」

夕霧は小野の手紙をいざこざなしに取ってしまいたい心から妻を欺くと、夫人は派手^{はで}に笑つて、

「はなやかなことをあなたがしようとしていらつしやるから、古いじみな女の私が一方で苦しんでいるのですよ。にわかにつきかりまじめでなくおなりになったのですもの、私にはそうした習慣がついていないのですから苦しくてなりません。初めからそうしておいでになればよかつたのよ」

と恨めしがる妻も憎くはなかつた。

「にわかにとあなたが思うようなことが私のどこにあるのですか、

あなたは疑い深いのですね。私を中傷する人があるのでしよう。そうした人たちは初めから私に敵意を見せていたものだ。浅葱あさぎの色いろの位階服いはいが軽蔑けいべつすべきであつた私を、今だつてあなたの良人にさせておくのが残念で、何かほかの考えを持つている者などがあつて、いろいろな噂うわさをあなたに聞かせるのだらう。一方で私のためにそうした濡衣ぬれぎぬを着せられておいでになる方もお気の毒なものだ」

などと言いながらも夕霧は、女二によにの宮みやの御良人となることも堅く期きしているのであるから、深く弁明はしようとしないのであつた。乳母めのとの大輔たゆうは氣術きじゆつながつて何も言おうとしなかつた。なお夫人は奪つた手紙を返そうとはせずにとこかへ隠してしまつた。

夕霧は無理に取り返そうとはせず、冷静に見せて寝についたのであるが、動悸どうきばかり高く打ってならなかった。どうかして取り返したい、御息所の手紙らしい、どんな内容なのであろうかと思うと眠ることもできないのである。夫人が寝入ってしまったので、宵よいにいた所の敷き物の下などをさりげなく大将は捜すのであるが見つからなかった。深く隠すだけの時間のなかったのを思うと、近い所に置かれてあるに違いないと思うのに見つけられないのが齒がゆくて、悩ましい気持ちになり、夜が明けてもなお起きようとしなかった。夫人は子供に起こされて寢所からいぎつて出る時に、夕霧も今日をさましたふうに半身を起こして、昨夜の手紙をまたも捜そうとするのであったが、見つけることは不可能であつ

た。夫人は良人がそんなふうおっとにほしがらぬ手紙はやはり恋の消息ではなかつたのであろうと思つて、もう氣にもかからなかつた。子供がそばで騒ぎまわつたり、やや大きい子が人形を作つて遊んだり、本を読んだり、手習いをしたりするのをいちいち見てやらねばならぬ忙しい時にも、また一人の小さい子が後ろから這はいかつて来てつかまり立ちをしようとするような、母であるための繁忙に追われて、夫人はもう奪つた手紙のことなどは忘れ切つていた。男は他のことはいつさい思われなほほど手紙がほしかつた。小野へ今朝早く消息をしたいと思うのであるが、昨夜の手紙に書かれてあつたことをよく見なかつたのであるから、それに触れずに手紙を書いては、先方のものをそまつに取り扱つて散らせてし

まったことが知れてまずいことになるかと煩悶をしていた。夫婦も子供たちも食事を済ませてのどかになった昼ごろに、大將は思いあまつて夫人に言うのであつた。

「昨夜のお手紙には何と書いてあつたのですか。ばかなことを言つてあなたが見せてくれないものだから、今日もこれからお見舞いをしなければならぬのに困つてしまう。私は気分が悪くて今日は六条へも行きたくないから、手紙で言つてあげなければならぬのだが、昨日のことがわからないでは不都合だから」

夕霧の様子はきわめてさりげないものであつたから、手紙を隠した自身の所作が、むだなことをしたものであると思つと、急に恥ずかしくなつたが、それは言わずに、

「先夜の山風に身体からだを悪くいたしましたからとお言いわけをなさればいいじゃありませんか」

と言った。

「つまらんことばかり言うのですね。何もおもしろくないじゃありませんか。私が世間並みの男のように言われるのを聞くとかえつてきまりが悪くなりますよ。女房たちなども不思議な堅い男を疑うあなたを笑うだろうに」

冗談じょうだんにして、また、

「昨夜ゆうべの手紙はどこ」

と言ったが、なおすぐに取り出そうとは夫人のしないままで、ほかの話などをしてしばらく寝ていたが、そのうちに日が暮れた。

ひぐらし

蝸の声に驚いて目をさました大将は、この時刻に山荘の庭を霧が
どんなに深くふさいでいることであろう、情けないことである、
今日のうちに昨日の手紙の返事をすら自分は送ることができな
ったのであると思つて、何でも無いふうすざりに硯の墨をすりながら、
どんなふうたんそくに書いて送つたものであらうと歎息をして一所を見
つめていた目に敷き畳の奥のほうの少し上がっている所を発見し
た。試みにそこを上げてみると、昨日の手紙は下にはさまれてあ
つた。うれしくも思われまたばかしくも夕霧は思った。微笑
をしながら読んでみると、それは苦しい複雑な心を重態の病人が
伝えているものであつたから、大将の鼓動は急に高くなつて、自
分がしいて結合を遂げたものとして書かれてあると思うと気の毒

で心苦しくて、第二の夜の昨夜に自分の行かなかつたことでどんなに御息所みやすどころは煩悶はんもんしたことであろう、今日さえまだ手紙が送つてないということは、新婚の良人おとととしていえばきわめて無情な態度である。露骨に言わずに自分の行くのを促してある消息を受けていながら、自分を待ちつけることがしまいまでできずに今朝になつたのであつたかと思うと、大将は妻が恨めしくも憎くも思われた。無法なことをして大事な手紙を隠させるようなしぐさも皆自分がつけさせたわがままな癖であると思うと、自分自身にすら反感を覚えて泣きたい気がした。これからすぐに行こうと夕霧は思うのであつたが、たやすく宮は逢あおうとなされないのであろうということとは予想されることであつたし、妻はこうして昨日から

嫉妬しつとをし続けているのであるし、それに今日が坎かんにち日にあたることはもし宮のお心が解けた場合を考えると、永久に幸福を得なければならぬ結婚の最初に避けなければならぬことでもあるからと、まじめな性格からは、恋しい方との将来に不安がないように慎重に事をすべきであると考えられて、行くことはおいて、まず御息所への返事を書いた。

珍しいお手紙を拝見いたしましたことは、御病氣をお案じ申し上げるほうから申しても非常にうれしいことでしたが、おとがめを受けましたことにつきましては何かお聞き違いになったのではないかと思われるのでございます。

秋の野の草の繁みは分けしかど仮寝の枕結びやはせし

弁明をいたしますのもおかしゆうございませうが、宮様に対して御想像なさいませうような無礼を申し上げた私では決してございませぬ。

という文である。宮へは長い手紙を書いた。そして夕霧は厩の中の駿足の馬に鞍を置かせて、一昨夜の五位の男を小野へ使いに出すことにした。

「昨夜から六条院に御用があつて行つていて、今帰つたばかりだと申してくれ」

大將は山莊へ行つてからのことであらういろいろに注意を与えた。

小野の御息所は、昨夜は夕霧の来ないらしいことに気がままれて、あとの評判になつては不名誉であろうこともはばかられずに、促すような手紙も書いたのに、その返事すら送られなかつたことに失望をしていてそのまま次の今日さえも暮れてきたことに煩悶を多く覚えて、やや軽くなつたふうであつた容体がまた非常に険悪なものになつてきた。かえつて宮御自身は御息所の思い悩む点を何ともお思ひになるわけはなくて、ただ異性の他人をあれほどまでも近づかせたことが残念に思われる自分であつて、彼の愛の厚薄は念頭にも置いていないにもかかわらず、それを一大事として母君が煩悶していると、恥ずかしくも苦しくも思召されて、母君ながらそのことはお話しになることもできずに、ただ平生より

も羞恥しゆうちを多くお感じになるふうの見える宮を、御息所は心苦しく思い、この上にまた多くの苦勞をお積みにならねばなるまいと、悲しさに胸のふさがる思いをした。

「今さらお小言おこごとらしいことは申したくないのでございますが、それも運命とは申しながら、異性に対する御認識が不足してしまいましたために、人がどう批難をいたすかしれませんことが起こつてしまいましたのですよ。それは取り返されることではございませんが、これからはそうしたことによく御注意をなさいませ。つまらぬ私でございますが、今までは御保護の役を勤めました、もうあなた様はいろいろな御經驗をお積みになりました、お一人立ちにおなりになりましたも充分なように思つて、私は安心してい

たのでございますよ。けれどまだ実際はそうした御幼稚らしいところがあつて、隙をお見せになつたのかと思ひますと、御後見のために私はもう少し生きていたい気がいたします。普通の女でも貴族階級の人は再婚して二人めの良人を持つことをおとをあさはかなことには人は見ているのでございますからね、まして尊貴な内親王様であなはいらつしやるのでございますから、あそばすならすぐれた結婚をなさらなければならなかつたのでございますが、以前の御縁組みの場合にも、私はあなた様の最上の御良人ごりようじんとあの方を見ることできませんで、御賛成申さなかつたのですが、前生のお約束事だつたのでしうか、院の陛下がお乗り気になりました許容をあそばす御意志をあちらの大臣へまずもつてお示しにな

ったものですから、私一人が御反対をいたし続けるのもいかがか
と思ひまして、負けてしまいましたのですが、予想してすでに御
幸福なように思われませんでしたことは皆そのとおりでお気の毒
なあなた様にしてしまいましたことを、私自身の過失ではないの
ですが、天を仰いで歎たんそく息しておりました。その上また今度のこ
とでございます。あの方のためにも、あなた様のためにも、これ
は世間が騒ぐはずのことですから、どんなに堪えがたい誹ひぼう謗の声
を忍ばなければならぬかしれませんが、しかしそれはしいて忘れ
ることにいたしましたしても、あの人の愛情さえ深ければながい月日
のうちには見よいことにもなろうかと、私はしいて思おうとする
のですが、まったく冷淡な人でございますね」

と言いつつ御息所は泣くのであつた。あつた事実と独断してこう言うのを、御弁明あそばすこともおできにならない宮が、ただ泣いておいでになる御様子は、おおようで可憐かれんなものであつた。御息所はじつと宮をながめながら、

「あなたはどこが人より悪いのでしよう。そんなことは絶対になり。何という運命でこうした御不幸な目にばかりおあいになるのだろうか」

などと言っているうちに御息所の容体は最悪なものになつていった。物怪もののけなどというものもこうした弱り目に暴虐をするものであるから、御息所の呼吸はにわかにとまって、身体からだは冷え入るばかりになつた。律師もあわてて願がんなどを立て、祈きとう禱に大声を放

っているのである。御みほとけ仏に約して、自身の生存する最後の時まで下山せず寺にこもると立てた堅い決心をひるがえして、この人を助けようとする自分の祈祷が効を奏せず失敗して山へ帰るほど不名誉なことではなくて、その場合には御仏さえも恨むであろうことを言葉にして祈っているのである。宮が泣き惑うておいでになるのもごもつともなことに思われた。

この騒ぎの中で、大将の消息が来たという者の声を、御息所はほのかに聞いてそれでは今夜も来ないのであるうと思つた。情けないことである、こうした恥ずかしい名を宮はまたお受けになるのであるう、自分までがなぜ受け入れるふうな手紙などを書いてやったのであろうと悶もたえるうちに御息所の命は終わった。悲しい

ことである。昔から物怪のためにたびたび大病をしてもうだめなように見えたこともおりおりあつたのであるから、また物怪が一時的に絶息をさせたのかもしれないと僧たちは加持かじに力を入れたのであるが、今度はもう何の望みもなく終しゅうえん焉ていの体はいちじるしかった。宮はともに死にたいと思召す御様子でじつと母君の遺骸いがいに身を寄せておいでになつた。女房たちがおそばに来て、

「もういたしかたがございません。そんなにお悲しみになりましたも、お死になつた方がお帰りになるものでございませぬ。お慕いになりましたもあなた様のお思いが通るものでもございませぬ」

とわかりきつた生死の別れをお説きして、

「こうしておいであそばすことは非常によろしくないことでございます。お亡かくれになりました方をお迷わせすることになりますから、あちらへおいであそばせ」

お引き立て申して行こうとするのであるが、宮のお身体からだはすぐんでしまつて御自身の思召すようにもならないのであつた。祈祷の壇をこわして僧たちは立ち去る用意をしていた。少数の者だけはあとへ残るであろうが、そうしたことも心細く思われた。ほうぼうから弔問の使いが来た。いつの間知つたかと思われるほどである。夕霧の大將は非常に驚いてさつそく使いを立てた。六条院からも太政大臣家からも来た。ひつきりなしにそうした使いが来るのである。御寺みでらの院もお聞きになつて、御愛情のこもつたお

手紙を宮へお書きになった。この御消息が参つたことによつて、悲しみにおぼれておいでになつた宮もはじめて頭つむりをお上げになつたのであつた。

いつかから病気がだいぶ重いということは聞いていましたが、平生から弱い人だつたために、つい怠つて尋ねてあげることがもしませんでした。故人の死をいたむことはむろんですが、あなたがどんなに悲しんでおられるだろうと、それを最も私は心苦しく思います。死はだれも免れないものであるからという道理を思つて心を平静にしなさい。

とあつた。宮は涙でお目もよく見えないのであるが、このお返事だけはお書きになつた。平生からすぐに遺骸いがいは火葬にするよう

にと御息所みやすどころは遺言してあつたので、葬儀は今日のうちにするこ
とになつて、故人の甥おいの大和守やまとのかみである人が万端の世話をしてい
た。亡骸なきがらだけでもせめて見ていたいと宮はお惜しみになるので
あつたが、そうしたところではしかたのないことであると皆が申し
上げて、入棺などのことをしている騒ぎの最中に左大将は来た。
「今日弔問に行つておかないでは、あとは皆、そうしたことに私
の携われない暦になつているから」

などと、表面は言つて、心の中では宮のお悲しみが悲しく想像
され、少しでも早く小野へ行きたく思つているのに、

「そんなにまですぐにお駆けつけになるほどの御関係でもないで
はございませんか」

と家従たちが諫めるのを退けてしいて出て来たのである。しかも遠距離ですぐにも行き着くことのできない道は夕霧をますます悲しませたのであった。山荘は凄惨せいさんの気に満ちていた。最後の式を行なわれる所は仕切りで隠して人々は例の西の縁側のほうへ大将にまわってもらった。

妻戸の前の縁側によりかかって夕霧は女房を呼び出したが、だれも皆平静な気持ちでいる者はないのである。大将が来たことで少し慰められるところがあつて少将が応接に出た。夕霧も急にものは言えないのであつた。すぐ泣くふうの人ではないのであるが、ここの悲しい空気に人々の様子も想像されて無常の世の道理も自身に近い人の上に実証されたことにひどく心を打たれているので

ある。ややしばらくして、

「少しおよろしいように伺ったものですから、安心していたのですが、何たることが起こったのでしよう。どんな悪夢でもさめる時はあるのですが、これはそうした希望も持てませんことを悲しく思います」

と宮への御挨拶あいさつを申し入れた。御息所が煩悶はんもんしていたことをお思ひになつて、大將が原因で免れがたい運命とはいえ母君はお亡なくなりになつたとお思ひになると、恨めしい因縁の人の弔問に宮はお返辞すらあそばさない。

「どう仰せられますと申し上げればよろしゅうございましょう。重いお身柄をお忘れになつてすぐにこの遠い所をお弔くやみにおいで

くださいました御好意を無視あそばすようなお扱いもあまりでございましょうから」

女房が口々に言うつと、

「いいかげんに言つておくがいい。何を何と言つていいか今はそんなこともわからない」

宮がこう言つて横になつておしまいになつたのももつともなこの場合のことであつたから、女房が、

「ただ今のところ宮様はお亡かくれになつた方同然でいらつしやいます。おいでくださいましたことは申し上げておきました」

と夕霧へ言つた。この人たちは涙にむせかえっているのであるから、

「何とも申し上げようのないことですから、私の心も少し落ち着き、宮様の御気分もお静まりになったところにまた参りましょう。どうしてそんな急変が来たのか、私はその理由だけを知りたい」と大将は女房に言った。露骨には言わないが少将は御息所の煩悶した一昼夜のことを少し夕霧に知らせて、

「そう申してまいればお恨み言になつていけません。今日は頭が混乱しておりまして間違つてお話し申し上げることがあるかもしれません。それでは宮様のお悲しみもいずれはおあきらめにならなければならぬことをごさいますから、御気分のお落ち着きになりますところにまたおいでくださいまし」

と言った。その人たちも気を顛倒てんとうさせている様子を見ては、

大将も言いたいことが口から出ない。

「私の心なども暗闇まっくらになったように思われるのですから、宮様としてはごもつともです。極力お慰め申し上げて、あなたがたの力で今後少しのお返事でもいただけるように計らってください」

などと言いおいて、長い立ち話をしていることもさすがに出入りの人の多い今日の山荘では軽々しく見られることであろうとはばかりで、大将は帰ることにした。今夜のうちに済ませるために納棺その他のことを着々進行させている物音にも、盛大ならぬ葬儀の悲哀が感ぜられて、大将はこの近くにある自家の荘園から侍たちを招いて、いろいろな役を分担して助けることを命じていった。急なことであつたから自然簡単に済ませることになつた葬儀が、

これによつて外見をきわめてよくすることができるようになった。
やまとのかみ
大和守も、

「すべて殿様のありがたい御親切のおかげでございます」
と感謝していた。

母君を何も残らぬ無にしておしまいになつたことで、宮は伏し
転まろんで悲しんでおいでになつた。親は子にこのかたがたのような
片時離れぬ習慣はつけておくべきでないと思ひ、宮のこの御状態
を女房たちはまた歎き合つた。大和守が葬儀の跡の始末を皆して
から、

「こんなふうになさいまして、まだながく寂しい山荘においでに
なることは御無理です。いつそうお悲しみが紛れないことになり

ましよう」

などと宮へ申し上げるのであつたが、宮は母君の煙におなりになつた場所にせめて近くいたいと思^{おぼしめ}召す心から、このままこへ永住あそばすお考えを持つておいでになつた。忌中だけこもつている僧たちは東の座敷からそちらの廊の座敷、下屋^{しもや}までを使つて、わずかな仕切りをして住んでいた。西の端の座敷を急ごしらえの居間にして宮はおいでになるのである。朝になることも夜になることも宮は忘れておいでになるうちに日がたつて九月になつた。山おろしが烈^{はげ}しくなり、もう葉のない枝は防風林でも皆なくなつた。寂しさの身にしむこの季節のことであるから、空の色にも悲しみが誘われて、宮は歎^{なげ}きを續けておいでになる。命さえも

思うどおりにならぬと悲しんでおいでになるのであつた。女房たちも二重三重に悲しみをするばかりである。夕霧からは毎日のようにお見舞いの手紙が送られた。寂しい念仏僧を喜ばせるに足るような物もしばしば贈られた。宮へは真心の見える手紙を次々にお送りして、自分の恋に対して御冷淡である恨みを語るほかには、今も御息所の死を悲しむ真情を言い続けた消息であつた。しかも宮はそれらを手に取つてながめようともあそばさないのである。あのいまわしかつた事件を、衰弱しきつた病体で御息所は確かに悲しみもだえて死んだことをお思いになると、そのことが母君の後世ごせの妨げにもなつたような気があそばされて、悲しさが胸に詰まるほどにも思召されるのであるから、大将に触れたことを言う

と、その人を恨めしく思召してお泣きになるのを見て、女房たちも手の出しようがないのである。一行のお返事さえ得られないのを、初めの間は悲しみにおぼれておいでになるからであろうと大将は解釈していたが、今に至るも同じことであるのを見ては、どんな悲しみにも際限はあるはずであるのに、今になってもまだ自分の音信たよりに取り合わぬ態度をお続けになるのはどうしたことであろう、あまりに人情がおわかりにならぬと恨めしがるようになって。関係もないことをただ文学的につづり、花とか蝶ちゅうとか言っているのであったなら、冷眼に御覧になることもやむをえないことであるが、自身の悲しいことに同情して音信たよりをする人には、親しみを覚えていただけけるわけではないか、祖母の大宮がお亡かくれにな

つて、自分が非常に悲しんでいる時に、太政大臣はそれほどにも思わないで、だれも経験しなければならぬ尊親の死であるというふうに見えて、儀式がかったことだけを派手はでに行なつて万事了おわるといふ様子であつたのに、自分は反感を感じたものだし、かえつて昔の媚でおありになつた六条院が懇切に身を入れてあとの仏事のことなどをいろいろとあそばされたのに感激したものである。これは自分の父であるというだけで思つたことではない、その時に故人の柏かしわぎ木きが自分は好きになつたのである。静かな性質で人情のよくわかる彼は、自分と同じように祖母の宮の死を深く悲しんでいたのに心を惹ひかれたものであつた。この宮は何という感受性の乏しいお心なのであろうと、こんなことを毎日思い続けている

た。夫人は山莊の宮と大将の關係はどうなっていたのであろう、御息所とは始終手紙の往復をしていたようであるがと腑ふに落ちず思つて、夕方空にながめ入つて物思おもいをしている良人おととの所へ、若君に短い手紙を持たせてやつた。ちよつとした紙の端なのである。

哀れをもいかに知りてか慰めんあ在るや恋しき無きや悲しき

どちらだか私にはわからないのですから。

夕霧は微笑しながら嫉妬しつとが夫人にいろいろなことを言わせるものであると思つた。御息所を対象にしていたらうとはあまりにも不そんたく似合あいな忖度であると思つたのである。すぐに返事を書いた

が、それは実際問題を避けた無事なものである。

何れとも分きて眺め^{なが}ん消えかへる露も草葉の上と見ぬ世に

人生のことがことごとく悲しい。

まだこんなふう^なに隠しだてをされるのであるかと、人生の悲しみはさしおいて夫人は歎^{なげ}いた。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年1月15日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：柳沢成雄

2003年5月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

夕霧一

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>